

第41回

うつのみやこども賞だより

令和6 (2024) 年度 6回

市内5・6年生の選定委員さんたちが、月に4冊の本を読んで、年間で一番友達にすすめたい本に「うつのみやこども賞」を贈っています。

《今月選ばれた本》

『となりのきみのクライシス』

濱野 京子／作 トミイ マサコ／絵 (さ・え・ら書房)

～読んだ本の感想より～



令和6年11月10日

- 光咲のおじいちゃんや紀里佳のお母さんにひいきをされていて、「子どもの権利条約」というものがあることや、子どもにも権利があるということを知ってとても良かったです。
- おじいちゃんが男だからってかわいがったりすることを「やめて」と言えたことはすごいことで、難しいことだと分かった。
- 私の両親は、ひいきや差別、家庭内暴力などは無いけれど、もしかしたら私の周りにはそんな人がいるかもしれないし、もしいたら、大人に相談したり、「子どもの権利」について伝えてあげたいと思いました。
- さまざまな悩みを抱える子どもたちが、自分たちで問題を解決していくところが良いと思った。子どもの権利とは何かを考えさせられる本だった。
- 父の暴力・母の過干渉・先生のセクハラと、身の回りの人に危機がさまっていて、理解のある人だと思っていた親も、実は問題があって…と、それぞれのクライシスを回避する過程で子どもたちが成長していく姿が面白かった。無意識に子どもの権利を侵害しているから、深く考えさせられた。

『わたしに続く道』

山本 悦子／作 (金の星社)

- 最初、リイマは黒人だからといって差別をされていたけれど、おばあちゃんとケニアに1週間行ったことで自分のことが分かり、最後はグァデーに会えて感動しました。
- 差別されてしまっている主人公はかわいそうだと思ったけれど、帰国したとき、差別を気にしなくて良いと分かって、面白かった。
- 本当の差別とはどういうことなのか、なぜリイマたちが「人種差別」をされてかわいそうだと思われるのか考えさせられる本だと思います。
- リイマは最初、肌の色などで悩んでいたけれど、ケニアに行くことによってその問題(悩んでいたこと)を1つ1つ解決できていて、良い物語だなと思いました。

『変身』

佐藤 いつ子／作 (文研出版)

- 小夏がちいちゃんに学校でのつらい悩みを相談する場面は、とても切なくて感動しました。
- いろんな事件が交じり合い、1つの物語になっていくところがすごくよかったです。「変身」というワードにからむ意外な結末にワクワクが止まりませんでした。
- 様々なストーリーが重なり合っていて、みんなが1つの戦いに向かっていくという物語に感動した。
- 萌子が虫になってしまった後、りおんが姉のこと、萌子のこと悩んでいくところが心に残りました。最後は、山内くんと一緒に萌子を助けられて良かったです。

『さよならミイラ男』

福田 隆浩／著 (講談社)

- 名前は怖かったけれど、主人公が立ち上がるお話でほっこりした。
- 今でもありそうな家庭環境と学校でのいじめ。でも、工藤さんのおかげでいろいろなことが起きていくおもしろい本だった。
- ミイラ男がアキトの空想の中のものだと分かった時はおどろいたけれど、アキトにとってミイラ男は、嫌なことがあった時にはげましてくれる友達みたいなものなんじゃないかな、と思った。